令和８年度　第２回長野市文化芸術振興審議会　会議録（概要）

日　時　令和８年９月 25 日（金）　午前 10 時から 11 時 30 分まで

場　所　長野市役所第二庁舎 10 階　会議室 203

出席者　委　員：齊藤会長、早川職務代理、多田井委員、樋口委員、樽田委員
内山委員、町田委員、酒井委員、渡邉委員、星野委員（10 名）
（欠席：藤倉委員、三ツ木委員）

事務局：（観光文化部）石坂部長
（観光文化部文化芸術課）倉島課長、山岸主幹、小池補佐、傳田補佐
（観光文化部文化財課）　高田次長
（文化芸術振興財団）　池田事務局長

資　料
第三次長野市文化芸術振興計画（素々案）

次　第
１　開会
２　観光文化部長あいさつ
３　会長あいさつ
４　議事
第三次長野市文化芸術振興計画（素々案）について
５　その他
６　閉会

会議録（概要）

（事務局）　議事について一括説明

（委　員）
計画について、非常によく整理されていると感じる。
特に最後の方にカラー写真がいくつか掲載されているが、今後もこうした写真を
掲載していく予定であるか。

市民が見たときに、「これは何の文化財を保護しているのか」ということが分かりにくいように感じる。公開する資料であれば、もう少し具体性があってもよいのではないか。
一方で、団体によっては具体的な名称を出すことを望まない場合もあると思うので、その点には配慮が必要である。
せっかく良い写真を掲載しているので、「これは何をしているのだろう」と思われるのではなく、市民が見て内容を理解できるよう、具体的な名称などを示していただけるとよいと思う。
また、他の部分についても、せっかく良い写真を使用しているのであれば、今の時代は「目で訴える」という視点も重要である。可能な範囲で、写真と併せて具体的な内容が分かるようにしていただければと思う。

（委　員）
長野市芸術館は、当初、発表の機会などもそれほど多くなかったと思うが、現在こうして計画を拝見すると、芸術館をはじめ、各文化ホールなどで多岐にわたる活動が行われており、大変ありがたいことである。その一方で、実際に活動する方々はもちろんであるが、それを支える観覧者、市民の皆さんへの周知についても、今後さらに積極的に進めていただければと思う。
市の広報などでも周知されると思うが、やはり新聞等に掲載していただくことも、多くの市民に知っていただくためには有効ではないかと思う。予算面での課題もあると思うが、できるだけ多くの市民に情報を届け、参加者数や実績の増加につながるような方策を検討していただきたい。
もう一点、子どもたちの絵画等についてである。
長野市では、さまざまな場所で子どもたちの作品を展示しているが、信濃教育会には、県内の小中学生から集められた大変素晴らしい作品が毎年集まり、保管されている。
こうした作品は、保管されているだけではなかなか人の目に触れる機会がない。その中から、長野市に関係する児童・生徒の作品をピックアップし、市のギャラリーや公共施設などで展示し、市民の皆さんに鑑賞していただくという取組も考えられるのではないか。
信濃教育会では、作品を無料で貸し出すことも可能であると伺っている。また、これまで長野市内の小中学校の子どもたちの作品が誰のものであるかについても把握されているとのことである。
そうした作品について、一度連絡を取っていただき、借用・展示することで、これまで保管されていた作品に日の目を見る機会をつくり、市民の皆さんに知っていただくことも一つの方法ではないかと思う。

（事務局）
年代別のアンケート結果も出ているが、全体を見ていただくと、年齢層によって情報を得る手段がかなり異なっていることが分かる。
新聞広告を見る世代、見ない世代、スマートフォンで情報を見る世代、そうでない世代など、非常に多様化している。
現在、観光文化部において情報などを発信する際にも、どこに、どのような方法で情報を出していくのが適切なのかという点について、非常に悩んでいるところである。
今回の詳細なアンケート結果を見ることで、その傾向がより明確になってくると思うので、今後はこうした数字も参考にしながら、より適切な広報の方法を検討していきたい。
また、子どもたちの作品について、現在市役所第一庁舎では、「長野市役所階遊美術館」として、子どもたちの作品も含めて展示する仕組みがある。
今後、信濃教育会や美術館、長野市芸術家などとも連携し、作品を借用して展示していただけるような取組ができれば、非常に良いのではないかと思う。

（委　員）
今回、観光文化部ということで、観光という視点を取り入れていただいていると思う。
24 ページの一番下に「観光分野との連携」という記載があるが、地域経済の活性化を図るということは、もちろん大きな要素である。
一方で、例えば松代には多くの文化財があるが、そうした文化財の維持管理が図られるような視点も非常に重要であると思う。
国では、国立美術館などにおいて、入館料を設定・見直しながら、文化施設を維持していく方向性も見られる。
長野市においても、税に頼るだけではなく、入館料などを含め、文化財や文化施設が健全に維持管理されていくための仕組みという視点を入れていただければと思う。
また、インバウンドという言葉はあまり出てきていないが、現在、観光という面で大きく貢献しているのはインバウンドの方々であると思うので、そうした視点も入れていただければと思う。
もう一点、私は長野市芸術館の理事も務めているので、その観点から申し上げる。
全体として、現在の芸術館は、市の公共ホールとして、市民の皆さんのさまざまな文化活動に貢献していくことを目指しているが、外部からの誘客を積極的に行うという視点があまりないと思う。

例えば、セイジ・オザワ 松本フェスティバルのように、外から人を呼び込むという方向性も大事だと思う。
公共ホールを今後どのような方向にしていくのかということは非常に重要な話であるため、その点について、計画の記載を少し調整していただければと思う。

（委　員）
記載について、細かい点で恐縮であるが、意見を申し上げる。
23 ページに、今回の新しい計画の指標・目標が記載されている。その中では、指標の数値を算出するに当たり、コロナ禍の影響を考慮したという説明がある。
この考え方自体は妥当であると思う。
一方で、現在の計画の指標を総括している 16 ページや、18 ページの利用者数・参加者数についても、当然ながら令和 2 年度、3 年度頃はコロナ禍の影響が大きかったと思う。
新しい指標では「コロナ禍の影響を考慮した」と明記されているが、16 ページ等にはそのことが記載されていない。
例えば、16 ページの市有ホール施設の利用者数を見ると、現状値と比較して増加したという記載があるが、基準となる令和 2 年度や令和 3 年度の数値は、コロナ禍によって利用が大きく制限されていた時期のものだと思う。
その後の令和 4 年度以降の数値とは大きな差があるため、「令和 2 年度と比較してこれだけ増加した」とだけ記載すると、実際以上に大きく増加したように見える可能性がある。
もちろん、記載されている数値自体に誤りがあるわけではないため、数値はそのままでよいと思う。
ただし、公平に評価するためにも、どこかに「コロナ禍の影響を受けた数値である」ということを一言記載していただけるとよいのではないかと思う。

（委　員）
私からも、基本的な部分について何点か申し上げる。
20 ページに「文化芸術に親しみ、創造し、継承されている」というキーワードがある。
これは第六次長野市総合計画における文化芸術分野のキーワードであり、上位計画で定められているものだと思う。
ただ、「継承されている」という言葉で文が終わると、継承されること自体が目的であるようにも見えてしまう可能性がある。
文化芸術は、長野市民一人ひとりにとっての楽しさや、最近よく使われる言葉で言えば「ウェルビーイング」につながるものだと思う。

文化芸術が継承されること自体が目的なのではなく、文化芸術が継承されることによって、その先に市民一人ひとりのウェルビーイングが実現されるという視点があってもよいのではないか。
前回の第二次長野市文化芸術振興計画の 11 ページには、計画の基本理念として「文化芸術に親しみ、創造し、継承され、優しさとぬくもりあふれるまち」という趣旨の表現がある。
つまり、文化芸術が継承されることによって、優しさとぬくもりがあふれるまちになるという、長野市としてのイメージがさらに広がっている。
例えば、「文化芸術に親しみ、創造し、継承され、笑顔あふれる長野市」や「笑顔が広がる長野市」など、継承されることによって、その先に何が実現するのかが分かるような理念としてもよいのではないかと思う。
また、もう一点、「誇らしいまちである」という文言についてである。
21 ページの総合指標に「文化芸術が盛んで誇らしいまちである」という指標がある。
これは上位計画等で定められているため、使用しなければならないものだと思うが、少し気になるところがある。
例えば、長野市のスポーツ分野では「スポーツが盛んなまちである」という表現になっていると思う。
そうすると、「スポーツが盛んなまちである」と感じるかどうかを尋ねる指標になる。
一方、文化芸術については「文化芸術が盛んで誇らしいまちである」となっているため、「盛んなまちである」ということに加えて、「誇らしいと感じるか」という要素まで含まれる。
そのため、指標としてはハードルが高くなってしまうのではないかと心配している。
もし、指標として意図的に高いハードルを設定しているのであれば問題ないと思うが、そのあたりについてはいかがか。

（事務局）
おそらく、「誇らしい」という表現については、最近よく使われている「シビックプライド」という考え方に、かなり影響を受けているのではないかと思う。
また、「文化芸術に親しみ、創造し、継承されている」という表現については、庁内でもかなり議論したところである。
上位計画である総合計画においては、文化芸術分野に限らず、各分野ともこのような「ありたい状態」を示す表現で統一されているため、現状ではやむを得ないとも考えている。

変更できるかどうかは難しいところであるが、今回こうした意見があったことについては、総合計画の担当者にも伝えていきたい。

（委　員）
8ページの年代別の「文化芸術への親しみ」のグラフについてである。
10代、20代、30代では、映画やメディア芸術、美術、音楽などが挙げられているが、若者が既存の芸術分野にそれほど興味を持っていないのではないかと感じている。
若者が注目しているものは、従来とは少し違うのではないか。
例えば、美術で言えば、テレビなどでも取り上げられているストリートアートや壁画、あるいはインスタレーションなどがある。
インスタレーションは、一つの部屋や空間全体を使って表現する空間芸術である。
若者が見ているものは、そうした新しい表現の方向に移っているように感じる。
今後10年間の計画を考えるのであれば、こうした視点も取り入れる必要があるのではないか。
長野市にも、インスタレーションなどの新しい表現に取り組んでいる作家がいると思う。
そうした作家に来てもらうなど、新しいことに取り組んでいる人を積極的に呼び、その活動を情報発信することで、若者を呼び込むという取組も必要ではないかと思う。

（委　員）
確かに、これから先の 10 年間で社会の状況が大きく変わっていく可能性がある。
また、AI もこれだけ浸透してきている時代であるため、計画の中に新しいキーワードや視点を取り入れることは重要であると感じる。

（委　員）
現在、中学校の部活動などを見ていても感じることであるが、既存の芸術とメディア芸術との垣根がかなり薄くなっていると感じる。
私たちが学生たちを見ていても、その傾向を実感している。
例えば、中学校の美術部の生徒たちが実際にどのような作品を描いているかというと、アニメや漫画のキャラクターなどを題材にしていることも多くある。
そうした状況を踏まえると、10代、20代を対象とした今回のアンケート結果についても、こうした視点から読み取ることができるのではないかと思う。
さらに、現在は平面のデザインや絵画だけではなく、SNSを中心として、非常に短い動画を自分たちで制作することも若い世代の中で注目されている。

現在、私どもの学園でも「階遊美術館」で作品を展示させていただいているが、基本的には平面作品を展示している状況である。
しかし、今後 5 年、10 年と経過していく中では、デジタルサイネージのような映像を活用した展示なども必要になってくるのではないかと感じている。
また、今後、御開帳などで長野市を訪れる方も増えると思うので、まちなかにおいても、こうした映像やデジタル技術を活用した展示・発信ができるようになると、若者から見たまちの印象も変わってくるのではないかと思う。

以上